

---

# 赤眼の断罪者

織宮征

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤眼の断罪者

### 【Nコード】

N9843X

### 【作者名】

織宮征

### 【あらすじ】

桐生穿理の住む町で起こる奇怪な事件。常識を逸したその様々な事件に挑む穿理は、二年前に失った在り方を探し求めていく。物語の構成上、時系列を並び替えています。第一章『逃避移行者』第二章『異常生体者』まで予定しています。

地面がある場所が嫌いだった。

幼い頃、転んで膝を擦り剥いた。

初めての痛みが、私の心に亀裂を入れた。

だから、地面のある場所が嫌いになった。

でも、地面がない場所なんてどこにもない。

でも、地面がない場所に行きたかった。

私と同じ気持ちを持っている人を探した。

でも、いなかった。

ああ、それなら。

私が連れてくればいいんだと、そう思った。

暦は三月に突入した。

けれど町には、未だに冬の名残が深い。

日中は気温が上がってきたが、夜の八時を過ぎると低下も激しい。冷めきつた夜気が服の中を潜り抜けて肌を凍えさせる。

夜という時間が好きな私としても、早く暖かくならないだろうか、

などと勝手な期待を抱いてしまう。しかし、そんな期待を抱いても、私個人の考えで自然の摂理に変化が生じるはずもない。なので、この考えは心の底に眠らせておくことにする。

深夜十一時を過ぎた現在、街は静謐な夜を形作っていた。物音ひとつ聴こえない静けさは、同時に私の心を安心させてくれる。

元々シンとした、雑音のない場所を好んでいる私にとって、夜に出歩くのは一種の娯楽といえた。実家も一般家庭とは違って物静かな人達ばかりだった。そのような環境で育ったものだから、自ずとそういう場所を嗜好するようになってしまったのだろう。

かつん、かつんと地面から響く自分の足音が少し気に食わないけど、それは程度として許容できるから文句はない。というか、自分の行動で起こっている現象なのだから、文句の言いようがないのだが。

ともあれ、こうして静かな夜の街を歩いていると、やはり安心感と心地良さを実感できる。

そして、私がこうして理想の時間を過ごせるのは、皮肉なことにこの街で不可解な事件が起こっているからなのだが。

皮肉……というのは、事件という単語だけで、私に過去を思い出させるからである。

二年前。高校卒業を間近に控えた冬の季節に、街では殺人事件が勃発していた。その事件というものが、どうも一般世界での出来事では扱えなかったのだ。

知人の鷹塔たかとう曰く、一般世界から逸脱した事件には、二属性が存在するそうだ。

ひとつ。その事件が、人間の持つ常識と良識を蔑ろにした犯行であつた場合。

ふたつ。その殺人方法が、一般人に行える常識から逸脱していた場合。

前者は人間の持つ尊厳から除外された人間 『存在異端者』と呼称されている存在が行う行為である。

後者は 簡単に言うならば、鷹塔側の人間にしか行えない犯行であるらしい。

二年前の事件は完全に後者といえた。

二年前の殺人事件は、一言で言えば異常な出来事だった。何故なら、被害者の全員が首から上を失くしていたのだから。

しかし、それは刃物などによる切断ではなかった。

引き千切られたのだ。手で後頭部をがっしりと掴み、冗談のような腕力と握力で首から解体させた。

その光景を目の当たりにしたのは、私があいつを殺そうと決意した瞬間だった。

思い出すと、奥歯を軋ませるのは自然な行為といえた。

その後、なぜか私は一週間ほど眠り続けたらしい。

一週間後。私が目覚めたときには、葵は何事も無かったかのように自然に振舞っていた。

そして、目覚めると私は何かしらの変化を遂げたということを目覚めていた。

言うならば、一週間前の私と、目覚めたあとの私は思考することが変わっていたのだ。

そして、私は過去の異常思考から乖離された思考を用いて、二週間を過ごしてきた。

一週間の眠りに堕ちる以前の私 十八年間生きてきたきりゆうせんり桐生穿理の思考は、正常なモノとは断じていえなかった。

言うならば、負の感情で構成された人間であった。

人間の誰しもが用いている邪な感情。絶望、孤独、不義、疑心

その他にも様々な感情が存在するが、二年前の私は、その全てを受用して生きていた。

孤独に恋焦がれ、絶望に身を任せ、疑う心を忘れず、絶望が当たり前だという思考を抱いて生きてきた。

傍から見れば、おかしい人間だと思われていたことだろう。正の感情の欠片も持ち合わせていなかった私は、会話にも必然的に齟齬

が生じて、人と接することも出来なかった。

彼は、そんな事はお構いなしと言わんばかりに接してきた。変人でもある私と平等に、対等な対場で接してきたのだ。

しかし、その頃の私は疑心を忘失していなかった為、彼を疑い続けていた。

こんな私に接する理由はなんなのだろう、と。

だけど、私には人の心が読める訳がなく、人の心を探る勇氣もなかった。

滑稽な自分は、今になっても自分を嘲笑いたくなくなってくる。

でも、それが正しく過去である以上。

私は、変わってしまったということの意味しているのだ。

一時の間、何も考えずに呆と歩いていると、不可解な事件が起こる場所 東区のオフィス街まで来ていた。

件の事件の心臓とも呼べるオフィス街には、三十階を有に越えているであろうビルの群集が鎮座している。午前零時に近づきつつあるこの時間帯。散歩のついでに、私はそれを確認することにした。

鷹塔の話によると、それが起こるのは日付が変更された『瞬間』であるらしい。彼から貰った電子腕時計に目をやると……残り三十五秒だった。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

……腕時計の秒針がやけに煩く感じる。

時が止まったかのように、風景は乱れない。

一切の音が絶えたオフィス街は、まるで退廃した死街のようだ。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ……！

ぐちゃっ

聞き慣れない音が、両の鼓膜を刺激した。

振り向き、その場所まで足を運ぶと、そこには人間の死体が在った。

二車線道路の真ん中に存在する、魂の不在した肉塊。

首、腕、脚はこれ以上とない程に拉げており、その箇所をよく見ると、折れた花を連想させた。

周辺に漂い始める濃厚な死の臭い。路上に飛び散った体液は、この時間帯ともあつてか黒く淀んで見えた。

私の眼前に、死が体現されている。

二年前の記憶が脳裏に蘇りそうになり、狼狽しそうになった私は慌てて頭を振った。

そのように幻視させるのは、やはり二年前を引きずっているからか……。

「 だけど、これは違う」

そう。これをあいつだと思つてはいけない。

連想させようが幻視させようが、そう思うこと自体、あつてはならないのだ。

この死体がどんな原理で堕ちてきたかなんて知ったことではない。

感じるのは、私を惑わそうとしている『存在』に対する怒りだけなのだから。

翌日の午前十時。ベッドで微睡みの世界に浸っていた私を呼び起こしたのは、一本の電話だった。

『穿理。少し話したい事があるから事務所に来い。既に葵も到着している。ではな』

電話の主

たかとまつり 鷹塔祭は、一方的に話を進め勝手に締め括った。

だけど、そんな彼の行いは今に始まったことではない。自分勝手な鷹塔の性格には既に慣れてしまった。耐性が付いた、とも言うだろう。

ともあれ、呼ばれた以上は出向かなければならない。もし無視でもしたら私の働き口が無くなってしまう。就職も進学もしていない私にとって、金銭面での援助をしてくれているのは紛れもない鷹塔なのだから。

ジーパンと白色のネックシャツに着替え、二年前に買った十字架のシルバーアクセを首に下げて自宅のアパートを後にした。

鷹塔の住んでいる事務所は町の郊外にある。私の家からは丁度二キロくらいの距離だ。電車で向かうことも可能なのだが、私はどうしても電車というモノが好きになれなかった。人混み、揺れる車両、人の迷惑を顧みずに会話を行う他人。これらの要素の全てを私は嫌っている。自然、昔から電車に乗用しなくなっていた。

葵のヤツは私と対極の思考を用いているから気にしないのだろう。以前、「もう少し人の居る場所に慣れないか？」と言われたが、大きなお世話だった。

という私情があり、現在、私は徒歩で事務所に向かっていた。二キロの距離などどうということはない。嫌悪しているモノに乗るよりはかは幾分マシである。



この町の郊外と呼ばれる地区は、少なからず片田舎という印象を抱かせる。郊外は田園地帯という語源とも連結している。その言葉通り田んぼや竹林が視界いっぱいに広がっていた。

そんな自然溢れる風景の中に、周囲との調和を成していない事務所は構えてある。

いや……何度見ても、これを事務所と呼ぶには無理がある。他人がこの建造物を初見すると、絶対に「イカれた人が建てた」と言うに違いないだろう。

地上のどの位置から見ても二等辺三角形を象っていて、階層を上る毎に面積が狭くなる構造になっているのだ。建物の外見を端的に表すならば……ソフトクリームのクリームの部分。

……まあ、この建物自体、空間と空間の狭間に形成した『実在しない建造物』つまりは『魔術』とやらで創ったらしい。本人は「バベルの塔を意識して創った」と自慢げに話していた。理解の及ばない原理なんて解ろうとするだけ無駄だ、と悟った私は、いつしか気にはしなくなっていた。

私は正面口の玄関の扉を開けて、内部に入った。

「あ、穿理。おはよう」

二階の一室に入ると、ソファつきみやあおいに月宮葵、窓際のデスクに鷹塔祭がいた。

見ると、葵はいかにも眠たげな表情をしていた。意識が完全に覚醒していないかのような、呆とした表情。……おそらく、また鷹塔に仕事を手伝わされたのだろう。

葵は白いカッターシャツに黒色のジャケット、紺色のジーパンといった身なりをしていた。彼は年賀ら年中、いつもこのセットを着服している。本人曰く、「服装を見せる相手は穿理と鷹塔さんくらいだから、気にしてもしょうがない」という事らしい。……そういう問題ではないと思うのだが。

そんな彼は、二十一歳という年齢にそぐわぬ容姿をしている。身

長こそ平均的なモノだが、白い肌と中性的な顔立ち、何より女性のように大きな瞳が、こいつを一層美男子として構成させていた。茶色の髪は肩に掛かるくらいの長さだ。彼の総髪は染めたという訳ではなく、ただ単に外国人と日本人の両親の間に生まれたから、という簡単な理由で片付いてしまう。……高校生の頃、その髪を黒髪にしると教師から咎められていた光景も、今となっては良い思い出だ。「遅かったじゃないか。鷹塔さんが待ちくたびれてるぞ」

咎めるわけではなく、その口調からは疲労しているように思えた。抑揚のない、疲れきった感じである。

「じゃあ、コーヒーを淹れてくるよ。穿理は日本茶だったか。鷹塔さん、給湯室を借りますね」

「ああ」

デスクに座って新聞に目を通していた鷹塔が、短く返事をした。葵は少しおぼつかない足取りで奥の部屋 給湯室に向かう。

新聞に目を通していた鷹塔は、葵の姿が見えなくなると視線を上げた。

「遅いぞ、穿理。お前が来るまでの時間、葵に次元空間の理論を延々と話していたこつちの身にもなれ」

葵とは対照的に、責めるような言葉を送る鷹塔。

「鷹塔が一方的に喋ってたんでしょ。葵、疲れきってたじゃない」「そりゃあな。昨晚も仕事の手伝いをしてもらっていたし、帰宅させてから二時間後に呼び出したんだ。疲れもするさ」

まるで悪気のない、飄々とした表情で言う。……鬼か、お前は。黒色のスーツを身に纏った魔術師は、「それで」と途端険しい目つきに変わった。

「今日のニュースを見たか？」

端的且つ、それだけで理解しろと言わんばかりに、鷹塔は視線を投げてきた。

「見る必要はないわ。昨日確認はしてきたもの。鷹塔の言った通り、午前零時ジャストだった」

「ほう。実物を拝見したというわけか。感想を聞こう」

「……よく解らない現象だったわ。周辺のビルから墮ちたようには思えなかった。二車線道路の真ん中に落下だなんて、飛行機なんかから落ちないとあんな事は起こらないでしょうね」

大体、あの現象が人の手によるモノだって事自体、疑わしい事だ。何も無い上空から人が落下するなんて、日常世界ではありえない以前にあつてはならない。

「だが、実際にお前は見たんだろ。ならば、その現象が現実世界で起こり得る事実だと証明されたわけだ」

「それは、そうだけど……」

「まあ、つもる話は葵特製のコーヒーが出来た頃に話そう。ソファにでも座つてろ」

命令に近い促しに、私はひとつ嘆息して頷いた。

穿理と鷹塔さんが会話をしている最中、俺は給湯室でコーヒーを淹れていた。

鷹塔さんは大のコーヒー好きだ。それは俺にも言える事で、二人でよくコーヒーについての話題をする。

しかし、鷹塔さん本人はコーヒーを淹れるのが不得意である。ならば何故コーヒー好きになったのか、という疑問を抱く。

端的に言えば、彼は俺と会うまでインスタントコーヒーしか飲んでたことがなかったらしい。俺は親父の影響で中学の頃から豆から淹れたコーヒーを飲んでいたので、自然と豆から淹れたモノしか飲まなくなっていた。

当初、その事を話した際、鷹塔さんは「なら、葵が淹れてくれ」と興味津々な様子で目を輝かせていた。俺としても、インスタントよりも豆から淹れたコーヒーを味わってほしかったで、彼の要望に応えた。

それ以来、俺が事務所に訪れた時は必然的にコーヒーを淹れるという仕事がいつの間にか定着していた。それ自体に異論はなく、既に日課となってしまうたこの作業を楽しんでいた。

逆に、穿理はあまりコーヒーという飲料を好まないらしい。愛飲しているのは日本茶らしく、苦い飲み物は嫌いだそうだ。

コーヒーには詳しくても、俺は日本茶を淹れたことがなかった。なので、給湯室の小型冷蔵庫に封入してあるペットボトルからコップに注いで穿理に渡している。

そんな日本茶を好む桐生穿理という女の子は、高校時代からの付き合いだ。

高校三年生の頃に同じクラスになり、新学期が始まって最初のホームルームで穿理が小声で自己紹介をした際。第一印象は変わった名前だな、というモノ。まあ、それは俺の苗字にも言える事なのだが。

腰まで届く黒髪は、まるで絹で出来ているかのような流麗さを感じさせた。

鋭利な瞳は、しかしどこか哀しみが宿っているような漆黒色。

身長は百五十センチ後半ほど。服の上からでも華奢な体つきをしているのが判る。

そして、その頃、俺はひとつ不思議に思っていた事があった。

穿理はクラスメートが話しかけても、返答こそするもののどこかおかしな感じだった。

会話が成り立っていない、とでも言おうか。

人間が行うコミュニケーション手段である『会話』が、彼女にはできなかったのだ。

その会話には少なからず齟齬が生じ、穿理自身も困惑した様子であったことを覚えている。彼女は会話を嫌っている訳ではなく、ましてや他人を嫌っている訳でもなかった。

拒絶も、孤立も、否定も。彼女自身は望んでいないように思えたのだ。

そんな彼女を見るに耐えられなくなった俺は、いつしか、積極的に穿理に話しかけていた。

会話を齟齬が生まれても、そんな事はどうでも良かった。

ただ単に。女の子が苦しんでいる姿を見たくなかっただけなのだ。

「葵。そろそろ出来るか？」

給湯室の外から、鷹塔さんの声が届いた。

いつの間にか出来上がっていたコーヒート、コップに入れた日本茶を持って、俺は給湯室を後にした。

「さて、葵特製のコーヒーが味わえたところで、本題に入るか」  
「コーヒーを飲み干した鷹塔さんは、満足げな表情を浮かべ、話し始める。」

先ほどまで座っていたソファは穿理が占有してしまったので、仕方なしに壁に腰掛けることにした。

「本題つて、この町で起きている不可解な事件のことですか？」

鷹塔さんが話題にするのは、決まってそういう話だと思つての言葉だ。

鷹塔さんはああ、と軽く首肯した。

不可解な事件。それは、二月の下旬から始まった、オフィス街で人間が空から落ちてくるというなんとも無気味な現象だ。いや、この説明自体では、飛び降り自殺なども類に入ってしまうので、訂正する。

ぶつちやけて言うと、何もない空から二車線道路の真ん中に落下してくるらしいのだ。俺も鷹塔さんと一緒に現場付近に行ったけど、現場の上には何もなかった。その頃は夜だったから、在ったの黒雲と少数の星々くらいだった。

被害者の三人は、この町に住んでいる人達である。既に身元も割れていて、彼ら三人に関係性も接点も皆無ということらしい。

そんな事件が二週間で三人も相次いだものだから、この頃のオフィス街に立ち入る者は限りなく減少しているらしい。

「葵。今回、何もない中空から人が落下してくる現象をどのように解釈する？」

と、鷹塔さんは突然の質問を投げかけてきた。その問いが今回の事件に関するモノだと理解した俺は、真面目に思考を回らせてみたりする。

何もない中空という事は、足場が無い場所からの落下だろう。飛

行機なんかから落ちらのならある程度納得がいくけれど、いや、飛行機という足場があったから、落下が可能になったんだ。ならば、この微妙な回答は矛盾していることになる。

何も無い中空。それは元々、足場というモノが存在しないということだ。その、人間という物体を支えてくれる地面が皆無な場所が、きっとそれに当てはまるのだろう。

なら、それを逆に考えると。

「……当てずっぽうですが、落下を行った場所は元々無くて、それで落ちてきたって事ですか？」

本当に思った事を口にしたのだが、鷹塔さんは「まあ、一般人の回答としては、良い線だ」と遠回りに褒めてくれた。

「中空、虚空、絶無の足場。こんな場所に存在してられるモノとするなら、それは人間ではなく飛行機や雲だな。人間は重力により、どうしても足場がないと存在してられない。足場がない場所に居たとしても、辿る道は必然的に死だ。逆に言うならば、死を辿りたいのなら足場のない場所に行けば良い。葵、今回の事件の被害者はな、この解と共通しているんだ」

「はあ。……って事は、被害者は最初から自殺をしたかったんですか？」

それにしたって、自殺を行う人間が、何故二車線道路の真ん中に落ちるのか。それがよく解らなかった。

「でも、二車線道路の真ん中に落ちる理由はないと思うわ。そんな事をするより、ビルの屋上から落ちた方が現実的じゃない」

と、突然会話に割り込んできた穿理は、どこか怒っているような様子だった。

「そうだな。現実的であり、かつ現実でありえる『普通の事件』として扱うとするならば穿理の意見が正しい。だが、今回の事件はもはや現実味が皆無だろう？ それの意味するのは非現実の扉が開かれたって事だ。」

先ほど俺が述べた部分 死を辿るなら足場のない場所に行けば

良いというのは、一般人が自殺を行う際に考える事じゃない。一般人が自殺を行うならば、穿理の言った通りビルの屋上からでも飛び降りればいいだけの話だ。二車線道路の真ん中に落下など、一般人に行える領域から逸脱している」

一般人に行えない行動ではない。そう言った鷹塔さんは、おもむろな動作で煙草を口に啜えた。

「えっと、じゃあ自殺を行った人達は、鷹塔さんのような非日常側の人間だったんですか？」

「馬鹿野郎。非日常に生きる人間が、自身の死を大っぴらにする理由がないだろ。癡、非日常に生きる人間の死というのはな、同じく非日常に生きる人間にしか明かさないものなんだ。日常世界で明確な死を表す。それは、日常世界に生きる観測者の記憶に刻み込まれるという事だ。非日常側の人間の代表としては魔術師が挙げられるが、もし日常世界での死を記録されると、俺達という存在が世界に認知されてしまう事と同一だ。現代において、俺のような魔術師が日常世界で死んだという事実が公表された例があったか？」

「……まあ、聞いた事はありませんね」

頬をポリポリと掻きながら返答する。確かに、魔術師という人達が現代で知れ渡ってしまったら、それは大事件だと思う。

そんな類に属する鷹塔さんは、「脱線した話を戻すが」と、百円ライターで煙草に火を点した。

「一般人が行える領域から逸している。だというのに現実世界での死を明らかにさせている。しかしこの場合、どちらか一方が正しい在り方でないとならないんだ」

「在り方なんて関係ないでしょ。死んでしまった以上、その在り方は消滅してしまってるんだから」

鷹塔さんの主張を非難するように、怒気を籠めたように言葉を発する穿理。……というか、穿理はさっきから何に対して怒っているのだろうか？

「そりゃあな。死してしまった者には、用いていた在り方は既に不



在しているも同然だ。だが、俺が言っているのは被害者に対する在り方ではなく、現象に対する在り方だ。

一般人が実行出来る領域から逸している。これが正しいのなら、被害者は自然と非日常に属する存在だ。

対して現実世界の死を明らかにしている。こちらが正しいとするなら、非日常には属さない人間の行動だと判断できる。

完全に矛盾しているだろう？ どちらかが正しいというのに、どちらも正しいとはいえない。しかし、現実はこのような現象が起きてしまった以上、どちらかが正しく在らなければならぬ。考えるときりが無い矛盾の極限現象さ、今回の事件は」

濃厚な紫煙を吐き出しながら、鷹塔さんは椅子にもたれ掛かる。それを言うなら、この二年間で起こった二つの事件も矛盾した出来事だったと思うのだが。

だけど、人間心理や物事に対する様々な論理に詳しい鷹塔さんを通じてしても、今回の事件は難解であるらしい。……そんな彼が解けない矛盾を俺達に聞かせたところで、解けるわけがないと思う。「話は終わり？ なら、三階のベッドを借りるわ。まだ寝たりないから」

不意に立ち上がった穿理は、確かに眠そつな様子だった。昨日、夜遅くまで起きていたのだろうか。

三階は八畳ほどのベッドルームになっている。以前、一度だけそのベッドで眠ったことがあったが、言い様のない不快感に陥った。「別に構わんが、周辺にあるモノには触るなよ。起動させてしまつたら大事だからな」

そう。たぶん俺が不快感に襲われたのは、周辺に置かれてある無気味な小道具のせいだ。憶測ではあるが、あれは魔術に係している品物なのだろう。前にあの小道具に関して訊いてみたのだが、「知らない方が身の為だぞ」と返された以上、今でも知る勇気が持てないでいた。

穿理は静かな足取りで部屋をあとにした。ボタン、という扉の閉

まる音が鳴ると、鷹塔さんは「葵、コーヒーのおかわりを頼む」と空になったカップを投げ渡した。……危ないですって。

給湯室でコーヒーを淹れ直して部屋に戻ったら、思わず咳き込んでしまった。

俺が給湯室に居た間に、鷹塔さんは煙草を何本か吸っていたらしい。部屋は濃密な紫煙で充満している。

「……鷹塔さん、吸いすぎはよくないですよ」

「うん？ ああ、悪いな。俺は一日一箱吸わないと我慢できないんだ。人を魅了し、惑わす効力があるモノは世界にいくらでも存在するが、煙草はその最も足るモノだな」

「要するに、鷹塔さんはニコチン中毒者ってわけですね」

「適当な相槌を打つ。それが真実に近い言葉だったつもりだけど、

「いいや、それは違うな」と鷹塔さんは否定した。

「中毒者と呼称される者は、その不特定の『何か』がないと生きていけない状態である者を指す。その『何か』に魅了、魅惑され、自己の存在を共有するんだ。真実、俺は煙草を愛煙しているが、魅了も魅惑もされていない。本当に我慢できない人間というのは、一日に三箱でも吸いきるさ。まあ、好んで吸っているのは事実だがな」

と、長い説明をする鷹塔さん。……俺からすれば、ただの言い訳にしか聞こえないのだが。

「と、コーヒーが出来たみたいだな。早くくれ」

新しい煙草を取り出しながら、そう催促する鷹塔さん。

俺はデスクに淹れたてのコーヒーを置いて、空いているソファーに腰を下ろした。

「そういえば、穿理、何か怒ってませんでした？」

ふと、思い出した事をそのまま口にする。鷹塔さんはカップを手にとって、音を立てながらコーヒーを飲んだ。

「……鈍感なお前には解らなかつただろうが、おそらく、事件を起

こしている犯人に対しての怒りだろうな」

「え……？ 何ですか？ 今回の事件は、穿理とは何ら関係性がないと思いますけど」

「だからお前は鈍感なんだ。……まあ、事件の本質を話していない以上、理解できる訳がないな。葵、穿理が嫌いなモノを二つ挙げてみる。嫌いな食べ物とかじゃないぞ。あいつが心の底から嫌悪している『感情的なモノ』だ」

……穿理が心の底から嫌っている感情的なモノ。彼女は好き嫌いがはっきりしている性格だから、思い浮かべるのは容易だった。

「 下位からいうと逃避、迷い……だと思えます」

それは今の彼女に適しているモノだ。

鷹塔さんは満足したように笑った。

「解っているじゃないか。なら、その二つの内で今回の事件に当てはまるはなんだ？」

畳みかけに問ってくる鷹塔さん。俺は先ほどまでの会話を思い出しながら、数秒間思考を駆け巡らせた。

「えっと……逃避、だと思えます」

「その根拠は？」

「さつき鷹塔さんが言っていた、死を辿るなら足場のない場所に行けば良いって言葉が、逃避の行動に思えたからです。死を辿るって事は、自ら自己の生涯を終わらせるって意味と連結していますし

俺から言わせれば、自ら死ぬという行為に走るのは逃避だと思います」

はっきりと、俺は自身の倫理観を述べた。

それは。二年前の穿理がそれに合致していたからだ。彼女は自分の価値観を誤った方向性へと定めてしまい、結果的にあんな事態へと陥ってしまった。

だから、あの時の穿理の行動は間違っていた。それは断言できる。「顔を上げる。思いつめるのは体に毒だぞ」

と、無意識に下げていた顔を上向ける。鷹塔さんは真剣な表情で

俺を見据えていた。

「穿理の事は一端置いておこう。あいつの前では口にしなかったが、今回の事件は、お前に話した次元空間の理論、そして逃避という観念的言語が深く関わっているんだ」

「……そうなんですか？」

何故、穿理の前では話さなかったんだろう、という疑問は残るが、俺は努めて話を促した。

「穿理が来る前にも言ったが、次元空間の理論とは、魔術の世界でも未だ立証されていない理論だ。一般的に空間利用は可能でも、次元の利用は、現代に現存する魔術師では不可能と言われている。まあ、一世代前は可能という説もあったんだが、これは話に無関係だな。

前者である空間の利用は、『結界』が例として挙げられるな。人間を無意識的に遠ざける人払いの結界、その場所への侵入を不可能にさせる結界、座標と座標を連結させ、居た場所から特定した場所へと位置関係を交わらせる結界。これらは全て、『空間』という概念を活用して行う。

対して、『次元』という概念は利用そのものが難しい。扱える面積、扱える距離が限られている『空間』とは異なり、次元は『時間』に干渉しなければならぬからだ。時間に干渉するというのは、現実世界の律を崩す事と同一だ。どちらか一方の律が狂えば、もう一方の律が狂うのも自然な流れとなってくる」

……全てを把握したわけじゃないけど、空間よりも次元を操る方が難しい、という解釈で良いのだろうか。

「それが、さっき言っていた逃避と何の関係があるんですか？」

これまでの話にその単語が入っていなかったため、俺はそう訊ねた。

「それは後に答える。話の優先順位を間違えるのは嫌だからな」

そう言って、鷹塔さんはコーヒカップを持ち上げた。

「葵。今回の事件はな、被害者が落下してくる時間が全てにおいて

午前零時ジャストなんだ」

「…………？ そうなんですか？」

「ああ」と肯いて、鷹塔さんはコーヒークップに口をつけた。

「深夜零時。それは日付が変更される刻であり、世界が変わる刻でもある。今のオフィス街は、完全に後者に当てはまっているんだ。さつき言っただろ、次元 『時間』 を操る者は、現実世界の調律を崩すと。昨夜、お前とオフィス街に立ち寄った時に調べたが、あそこは、深夜零時になると次元に亀裂が生じる仕掛けが施されていた。亀裂の場所は三箇所。その場所から地上を俯瞰すると解るだろうさ。その下が、被害者が落下した場所であるとな」

魔術師である鷹塔さんを以って言う事だから、それは間違いのない事実なのだろう。

鷹塔さんは続けた。

「さて、じゃあ最後である『逃避』という謎だが、これは単純明快な解だ。犯人はな、逃げたんだよ」

「逃げた…………？」

意味が解らず、思わず問い返してしまった俺に「そうだ」と、煙草を取り出す鷹塔さん。

そうして、黒色のスーツを身に纏った魔術師は事件の本質を語ったのだ。

三人目の駒が動き出す。

オフィス街は静まり返っていた。

無音、無声、無感。何もかもが死んでしまったかのような夜の街を、桐生穿理は緩慢な足取りで歩いていった。

空は暗雲が立ち込めている。今夜は月さえも見えない。

世界は闇に覆われ、息づく暇さえ与えない。

穿理はその場所まで歩くと立ち止まった。昨晚、三人目の犠牲者が落ちてきた場所だ。

死体は既に警察によって処理されているのだろう、今では血痕さえも残っていないかった。

次いで、穿理は上空を仰いだ。何もない中空。そこには確かに

何もなく、存在というモノが不在している。

電子腕時計を確認した十分前から、穿理は脳内で時間を数えていた。残り二十三秒まで達したその時、彼女は『連動』を開始する。

桐生穿理という人間の内界に宿る『負の感情』を、身体の隅々まで行き渡らせる。ただひたすら念じるのだ。

繋がれ、と。

そして、二十年という年月の中で培ってきた負の感情が、桐生穿理を異なる人間へと乖離させた。

瞳の色が毒々しい赤色に成り、前準備は整った。

残り五秒。

力子。

カチ。

カチ、カチ、カチ……ッ！

瞬間、穿理は真上へと高く跳躍した。見惚れるような優雅さを保って、その『次元』へと接近する。

その前に人が落ちてきた。四人目と予想されるであろう生きている被害者。穿理は五指に巻きつけている鷹塔が造形した特別製のワイヤーを巧みに操り、生きている被害者の体を縦に両断させた。

あっさりと人を殺したにも関わらず、穿理の表情に変化は窺えない。

穿理はさらに上空を目指す。

高さ十メートルほどまで到達した時、その少女の腕を掴み、次元の穴から引きずり出した。

「？まえた」

微笑いながら、穿理は言う。

狂気に似た笑みは、普段の穿理からは想像もつかない。

だが、今の桐生穿理は桐生穿理ではない。

人格が負の感情によって再形成された今、穿理はただ別の人格へと変革を遂げていた。

「あ」

次元の穴から引きずり出された、黒いワンピースを身に纏った少女は、桐生穿理という存在に戦慄と畏怖の感情を覚える。

『負の感情』を体現した少女と、

『逃避の感情』を行動に移した少女。

互いに誤った答えを見つけ、その道を歩んだ『存在異端者』。

しかし、穿理に引きずり出された少女は、その答えに無自覚だ。

故に、まだ自分が正しいと認識できる。

「くっ……っ！」



共に地面へと落下していく少女達。しかし黒い少女はどうあっても地面に落ちるわけにはいかない。

もう、痛いのは御免だ。

もう、心に傷を負うのは嫌だ。

それだけの『逃避概念』が、黒い少女を行動へと移行させた。

黒い少女は、落下地点に次元の穴を開ける。これで穴に潜り込めたら、また次元という地面がない場所へと帰られる。

だが、その穴に潜り込む前に。

何の前触れもなく、穿理は次元の穴を消失させた。

「ッ？」

驚愕を顕わにする少女。

穿理は変わらず無表情で、黒い少女の腕を掴んだままで 口を開いた。

「あなたの負の感情の根源は『逃避』ね。それなら、『連動』している私には根源の消滅は可能だわ」

……血のように赫い瞳が、黒い少女を捉える。

「負の感情に支配された人間は、遅からず死を迎える事になる。…あなたがあいつと関わっているかどうかは判らないけど、あなたを楽にしてあげられるのは私のようなわ」

穿理の五指に絡み付いていたワイヤーが、黒い少女の体を束縛し、自由を奪った。

それは、まるで十字架に張り付けられた罪人のよう。

「だから。あなたを苦しめた理を穿ってあげる」

穿理は実行に移す。

指先を動かすだけで事は済んだ。

そうして、黒い少女は両足と両手を切断された。

黒い少女を殺害した穿理は、もう用はなくなったとばかりにその

場から立ち去った。

……私の体を解体した女の子は去っていった。

地面に倒れ付している私の心に、様々な苦痛や悲痛が交じり合っ  
て、鬨ぎ合って、やがては消えていく。

数年ぶりに地面という場所を体感した私は、驚くことに痛みを感  
じていなかった。

それはきつと。精神面での痛みよりも、身体的な痛みの方が  
勝っているからだろう。

両手両足を切断された私は、もう地面に立つことが出来ない。

ああ。あれほど地面を嫌っていたのに、今では地面が何より  
も恋しい。

幼い頃、初めて地面で転んだ私は、何で地面なんかが存在してい  
るのだろう、と思っていた。

それは、私個人の勝手な苛立ちに過ぎなかった。

皆は、地面を歩くのが、地面に立のが当たり前だと言っていた。

それを理解しきれなかった私を唯一理解して救ってくれたあの人  
が、この場に現れてくれないだろうか、という幻想を抱いてしまう。

だけど、そんなのはただの妄想だ。

……背中に感じるアスファルトの感触。

未だ私が生きていると認識させてくれる地面。

「私は、間違っていたのかな……」

荒い呼吸のまま、一人呟く。

「ああ、間違っているぞ」

……どこからか、男性の声が聞こえてきた。

「たちはなれいか立華零香。……真名の通りの在り方をしていれば助かっていたものを。不運を呼び起こしたのは存在に對極する行動か。運がなかったな」

「あなた、誰……？」

「名乗る必要性は皆無だ。君は死という体験をする事で、俺という存在すら忘却してしまうからな」

……確かに。両手両足を断ち切られた私は、酸素欠乏によって遠からず死ぬだろう。もうすぐ死んでしまうヤツ　それも見知らぬ他人に名前を教えても、何かが変わるわけがない。

「穿理に斬られた切断面を見るに、長くは保たないだろう。しかし、十四歳そこらの成熟していない子供がよく十三分間も生きていられる。それも、負の感情の根源が『逃避』であるからか。……なるほど。君は逃げ続けるという行動概念の恩恵を受けているという訳か」  
男性はただ冷静だ。もうすぐ目の前にいる人間が死んでしまうというのに、この人は情すらもくれない。

「四人の一般人を連れていった理由を聞きたい。口が開けるなら話してくれ」

「私は、自分と同じ感情を持つ人をずっと探してたの。地上を嫌う人、地面に佇む事を嫌悪する人。地面で転んで心に傷を負った人。……でも、そんな人はいなかった」

そう。そんな正常ではない思考を持った人は、いなかった。

「でも、逃避つていう感情を持った人はたくさんいた。何かから逃げたい。この現実から逃避したい。それが……私の持つ感情と同じだったの」

だから。逃避という感情を抱いている人は、地面を嫌う人だと錯覚してしまった。

「でも、その錯覚を事実だと受用しちゃった。あの人達は逃避したかったらしいから、私が連れていっただけ」

「君の家は、人間の『感情』を無意識下で読み取れる家系だっ

たな。『立華』の血は君にも受け継がれていたというわけか。だが疑問は存在する。『立華』は感情を読み取る能力があっても、今回の事件のような、次元に穴を開ける能力などは用いていなかった筈だ。答えてもらおう。その人ならざる能力を、君はどうやって身に付けた？」

そんな質問をされても、答えられるわけがない。

幼い頃に私の感情を受け入れてくれたあの人は、どこに行ってしまったのかも判らないから。

「そろそろタイムリミットらしいな。」

逝く前にひとつだけ助言しておこう。逃避に走った人間は、その感情を他人と共有することは許されない。逃避を行うと決めた人間は、自分一人でこれからの生涯を生きていく責任があるからだ。誰の力も借りず、誰にも頼らず、孤独を背負って存在し続ける義務がある。君の感情の方向はとうに誤ってしまっていたが、久方ぶりに地上という場所を経験できただけでも、穿理に感謝することだな」

そう言って、男性の足音が遠ざかっていった。

私は、仰向けになっ たまま空を見つめた。

星々が煌く夜に、私という存在が失われようとしている。

でも、今は。除々に失われていく体温よりも、地面の冷たい感触の方が懐かしく思えて、小さく微笑えたのだ。

それは、地上で生きる者だけに与えられる権利だった。

三月五日。午後二時を過ぎた昼間に、俺は、穿理を連れて散歩に出かけていた。

近頃は大学が春休みに突入したという事もあり退屈な日々を過ごしている。今日は気温も高く穏やかな天候だった。突発的にこのような行動を起こしたのも、春の趣に魅了されてしまったからだろう。俺の隣を歩く桐生穿理という女の子は、いつも通り眠たげな表情をしている。昨晩は夜遅くに外出をしたらしく、自宅に帰ったのは深夜一時頃らしい。

「それにしても、昨日は夜遅くにどこに行ってたんだ？ 近頃は物騒な事件が続いてるんだから、夜の外出は控えた方がいいぞ」

「……うるさいわね。私も二十歳なんだから、夜に出かけたって良いでしょ」

拗ねたように目を背ける穿理。

「それに、あの不可解な事件はもう続かないわ」

「え、何でそんな事が分かるんだ？」

素朴な疑問を問うと、「……勘よ」と一言返してきた。

「勘か。まあ、穿理の勘は結構な確率で的中するからな。それを信じるよ」

納得して肯く。

それからというものの、何故か穿理は無言状態になってしまった。

無愛想な表情を維持したまま、俺と顔を合わせずに前を向いて歩く。そんな彼女の在り方は今に始まった事ではない。こういう時の穿理は、クールを気取っていても心の中で何かしらの事柄を考え続けている。そして、こちらも一時、無言になると

「ねえ、葵。何かから逃避をしなくなった事ってある？」

と、彼女から話しかけてくるのだ。一人で考えても結論に達していない時の彼女は必ず人に意見を尋ねる。それが彼女の良い所であ

り、意地っ張りな所でもある。

穿理の質問は、まるで自分自身に問いかけているように思えた。

俺は数秒間思索して、自分の考えを述べた。

「……そうだな。逃避なんて感情は人間なら誰もが用いているモノだし、誰もが一度は抱いた事がある経験だ。不特定の『何か』から逃げ出したい。こんな現実と向き合いたくない。そう思う事は誰だつてあるだろうしな。でも、逃避という行為に走って物事が良い方向に転がるなんて事はないと思うぞ。どんなに苦しくても、どんなに辛い境遇に陥っても、俺達は前を向いていかなくちやならないんだ。地に足を着いて、まっすぐにな」

本心からの言葉だったつもりなのだが、自分で言っただけ恥ずかしい気分になる。俺つて、こんなに格好つけだつたっけな？

「地に足を着いて、ね」

呟く穿理は、薄く、静かに笑っていた。それは彼女が滅多に見せない、今の感情を表現した笑顔だった。

同じ歩幅で歩く俺達は、やはり無言で散歩を続けた。

こつも会話がないと居た堪れない気分に陥るものだけど、全然そんな事はなかった。

寧ろ、穿理が同じ歩幅で歩いてくれているのが稀有な事態なのだ。いつもは一緒に歩いていても、すぐに先を行ってしまう彼女が歩幅を合わせてくれている。

……穿理の中でどんな心境変化が起こつたのかは知らないけど、今日は充実した散歩が出来そうだな、なんて思えた。

### 解ノ三

三月四日の深夜四時半。事務所に居た鷹塔祭は、電話機を使つてある人物に電話を掛けていた。

「俺だ。死体の解析は済んだか？ ……ああ、やっぱりか。でなければ、次元に穴を開けるなど実行できるわけがない。死体は総聖会

に引き渡すなよ。あちらに送れば実験の素材とされるに違いないからな。お前の所で火葬してくれ。ではな」

ガチャンツ、と受話器を戻した鷹塔は、ギリッと奥歯を鳴らした。

「まさか、な。あいつが関係していたとは」

ポツリと呟く鷹塔。その口調には、明確な怒りと、相反する哀しみが宿っていた。

事務所の窓から射し込む月光が、デスクに置かれている書類を鮮明にさせる。

白紙に近い書類には、一文だけこう綴られていた。

『三人目の犠牲者、立華零香』と。

動物が好きだった。

愛しくて、愛しくて、たまらなく愛くるしくて。

彼らと遊ぶのが、僕の娯楽だった。

でも、僕は人間で、彼らは動物だった。

だから、僕の言葉が彼らに伝わるわけがないし、

彼らの言葉を僕が理解できる筈もなかった。

解り合えないなんてとうに識っていた。

でも、彼らの意思を知りたかった。

そんな時、困っていた僕を助けてくれる人が現れた。

巷で有名になっていいる事件とやらを初めて耳にしたのは、葵<sup>あおい</sup>が今日の授業を終え、大学の正門前で落ち合った時だった。

「どういう意味、それ？」

彼が口にした言葉が些か物騒だったからか、私は思わず聞き返してしまった。

二人揃って帰り道を辿る。葵はなぜか肩を落としながら疲れきった様子だ。私の問いに応じるのも三十秒ほど過ぎた後だった。



「俺も教授から聞いただけなんだけど、今言った通り異常な事件でことだよ。事件の概要は昨夜のニュースとかで報道してるはずだけど　まあ、穿理<sup>せんり</sup>がテレビなんて見るわけがないか」

「うん、と首を縦に振りながら、勝手に納得する葵。馬鹿にするな私だってテレビくらい見る。昨日は……偶々見なかっただけだ。」

「なんか、西区の住宅街で殺人事件があったんだよ。被害者は昨夜だけで二人。周囲で悲鳴や叫び声は一切聞こえなかったらしい。で、異常ってというのは、その殺害方法のこと」

「曰く、二人の被害者の腹部には直径三十センチほどの大穴が空いていたらしい。それは刃物で穿たれたような小さな痕ではなく、まるで大鳥類の鋭利な喙<sup>くちばし</sup>で貫通されたような痕跡だったらしい。」

「確かに、異常な事件ね」

「私は納得して頷いた。」

「でも、周囲に悲鳴が聞こえなかったっていうのは不可解ね。殺人に遭う前の人間って、大抵の人は叫び声を上げると思うけど」

「私個人の意見に、彼も「ああ」と同意するように首肯する。」

「一般的に考えればそうだろうな。まあ、教授が異常な事件って銘打ったのもその辺りを考慮してのことだと思う。普通、殺害前の人間は精神混乱で悲鳴は上げるものだろ？　なのに、周囲に住んでいた人達は悲鳴なんて聞こえなかったって証言してるらしいからな」

「加えて直径三十センチほどの大穴ね。確かに、異常な事件って言うに相応しいわね」

「葵の言葉に返答こそするが、私はそれほど興味を持たずにいた。」

「誰がどんな目に遭おうと、所詮部外者である私には関係のないことだ。その被害者が死んで悲しむのは親族や友人だけだと思うし、名前も知らない他人に情を抱くのもおかしい。」

「対照的に、隣を歩く葵は険しい顔をしながら低く唸っていた。」

「葵。無関係の私達が考えても仕方のないことですよ。こういうのは警察に任せるのが一番よ」

「まあ、そうなんだけどな。気掛かりなこともあるから、俺にとっ

ては無関係とは言えないんだよ」

「気掛かりって?」

気になって問いかけると、葵は「まだ確証があるわけじゃないから言えないよ」と肩を竦めた。

……何か隠し事をされているみたいで、私は少なからず気分を悪くした。

二人で帰路を辿っている途中、葵は用事があるから先に帰ってくれと言い残して、私達は中心街で別れた。どこに寄るのか興味があつたのだが、追求するほどのことでもない気がしたので、敢えて尋ねはしなかった。

時刻はまだ午後四時半だ。夕暮れ時の空は橙色に染まっており、それを直視した私は、悲痛めいた感傷を蘇らせていた。

夕焼け空を眺めると、否応無しに一年前の出来事を思い出してしまう。いや、夕焼けの空自体は想起の起因となっていない。私がある出来事を思い出す根源的な原因は、午後四時から深夜十一時という時間帯を経験することに依る。

その時間を生きるだけで、忘却したいはずの過去が脳裏に蘇る。それは私の意思を完全に放棄して　まるで、それが当然のように意識を齎してしまうのだ。

私は、この午後四時から午後十一時までの時間を生きるのが嫌いだった。その、たった七時間が我慢できないのだ。

それは一種の逃避。人間として生きている限り、その時間帯は絶対に経験するものだ。それを否定するのはもはや人間の考えることではない気がする。

ではなにか? 私は人間じゃないのだろうか。

答えは否だ。私は人間としてこの世界で生きている。人間として十九年間を生きてきた。私はれっきとした人間なのだ。

なんて矛盾だ。人間として生きているのに、夕方から深夜の時間帯が我慢できないなんて。

それもこれも、一年前にあんな出来事があったからだ。あの出来事さえなければ、私は普通にこの七時間を意識せず生きることが可能だったのだ。

葵も少しは気に掛けると思えてくる。発端はお前だ、と言う勇氣は未だに持っていないけど、いつかは怒りをぶつけてやりたい。そうすることで、きっと少しは気が楽になると思えるから。

月宮葵は町の郊外に訪れていた。見渡す限り田園風景が広がり、思わず大きく息を吸って清浄な空気を肺に取り込む。

「とはいえ、こんな所に事務所があるのか？」

葵はジューパンのポケットに仕舞っていた折り畳んだ用紙を取り出し、場所を確認した。そこには事務所までの詳しい道取りが緻密に描かれている。

しかし、目的地の付近まで訪れても、そこには何もなかった。ただ田んぼだけが風景として認識される。電話で言っていた事務所など、どこを見渡しても存在しない。

「初めまして」

と、多少の混乱に陥っていた葵は、背後から声をかけられた。

「……？」

怪訝に思い振り向くと、そこにはいつの間にか、黒いスーツを身に纏った男性が立っていた。

身長は葵より二、三センチほど大きく百七十八センチはあるだろう。体格は成人男性と同等のもの。肩まで届く長い黒髪が不意に吹き抜けた風によって静かに靡いた。

口元には笑み。表情も飄々としたもので、どこか不敵な面立ちに思える。

「月宮葵くんだな。俺が鷹搭祭だ」

たかとうまつり

「あなたが、ですか？」

思っていたよりも若い。それが第一印象だった。歳は二十代後半ほどだろうか。電話で話した時は大人びた口調だったので、それなりに歳を取っているかと葵は推測していたのだ。

「ああ。しかし……月宮のご子息も大きくなったものだ。写真でしか拝見したことはなかったが、立派な大人になっている」

その言葉で、葵はこの人物が鷹塔祭であると正しく認識した。

「初めまして、月宮葵つきみやまおひです。この度はご相談をお受け下さり、本当にありがとうございます」

葵は深く頭を下げながら謝辞を述べた。

「いや、いいぞ。君のお父上からの伝手つてならば断るわけにもいかなからな。とりあえず事務所に入るか。いつまでも外にいても現状は変わらない」

そうして、鷹塔は親指で何もない虚空を指さした。

葵は首を傾げる。

「あの、その事務所ってどこにあるんですか？」

「ここだよ」

葵の問いに間髪入れずに返答した鷹塔は、不意に口元を小さく動かした。

「gate open」

どうにか聞き取れた言葉がそれだった。

瞬間、何かカタチを成していく。それはまるで、光学迷彩で隠されていたモノが顕わになっていく様であった。

完全に姿形を現したそれは、なんとも形容しがたいカタチをした建造物であった。造り事態はコンクリートで出来ているようだが、外見を眺めると啞然とするしなかった。

「……ソフトクリームみたいです。これが事務所なんですか？」

「バベルの塔を意識して構築したつもりなんだが、君も中々に失礼だな。まあいい。とりあえず中に入るぞ」

ため息混じりの促しに、葵はだらしなく口を開けたまま頷いた。

事務所の内部は、外から見た外見と照らし合わせると案外に普通な造型をしていた。鷹塔曰く、外界のどの場所から眺めても二等辺三角形に見えるように造型したらしい。

内部脇にある金属製の階段を上り、二階の事務室に入る。

十畳ほどの部屋には窓際に木造型のデスク、部屋の中心に来客用に二人が座れるくらいのソファアが配置されてある。部屋の右隅には、『給湯室』と書かれている扉がある。

部屋の内部は少々埃臭い感じがするが、相談を持ちかけ、さらには招かれた者としてどうこう言えはしない。

「ソファアに掛けてくれ」

鷹塔の端的な促しに葵はこくりと頷き、ソファアに座った。それなりに高級な生地を使っているのか、腰が埋まってしまっほどの柔らかさだった。

鷹塔も窓際のデスクにあるチェアに座った。

「さて、話を始めよう。　　と言いたい所だが、先に尋ねたいことがある。葵くん、先の現象を君はどのように解釈した？」

「先の現象、と言いますと？」

「俺がこの事務所を現実世界に現した仕掛けだよ。光学迷彩が切れたように姿を成していったらどう？　あの現象を、君は率直にどう思った？」

そう訊かれるが、葵は即座に返答ができなかった。あのような現象をこの目で見るのは初めてであるし、何よりあの現象は普通じゃない。それこそ、月宮葵の生きてきた十九年間で感じた未知のように。

「なんて言いますか……現実的じゃないと思いました」

口にできた言葉がそれだった。一般人の括りに属する月宮葵としては至極当然の返答である。

「ふむ。確かに君の生い立ちからすればそれ以外に返答はできないか。参考になった。まあ、この仕掛けをバラすとすれば、この事務所は魔術で形成した建造物だな。魔術の類では『形成魔術』に属する」

飄々とした顔で言う鷹塔だが、葵はこれっぽっちも理解できていなかった。

「魔術、ですか？」

顔を顰めて思わず聞き返してしまったのも、彼にしてみれば仕方のないことだった。

「ああ。君のお父上　つきみやさいじ月宮歳時さんからはこの言葉を聞いたことはないか？　あの人なら魔術に関しての知識を息子に伝えているものだと思っていたんだが」

「いえ、全く聞いたことがありません」

……というより、自分の父親が魔術なんてモノを知っている時点で初耳且つ驚愕ものだった。確かにオカルトっぽい品にはかなり興味がある性格をしてはいたが……。

鷹塔は足を組み直し、両手の五指を絡めながら葵を見据える。

「歳時さんから聞いた話、君には兄がいるそうだが、そちらも魔術に関しての知識はないのか？」

「はい。今は親父と一緒にイギリスにいますけど、兄はそういう事には無関心な方ですね」

ふむ、と鷹塔は顎に手を添えて黙考する。

「あの、鷹塔さん。俺から言うのも何ですが、今日ここに来たのはこういう話をするわけじゃなく　」

「うん？　ああ、そうだった。すまんな、興味本位で少しカウンセリングを試してみたかっただけだ」

カウンセリングにもなっていない気がするが……という突っ込みたい衝動を御して、葵は話を切り出した。

「今回の相談の件ですが、鷹塔さんは昨夜に起こった事件の概要をご存知ですか？」

「ああ。テレビや新聞では『異常な事件』と無駄な装飾をされているようだ。いや、無駄な装飾と認識してしまうのは俺が非日常側の人間であるからか。君のような一般人にしてみれば、『異常』という装飾は適切であるかもしれん。そして」

と、鷹塔は口元に薄い笑みを刻みながら目を細めた。

「その一般人の君から、『事件を解決したい』と相談を持ち込まれた時は、些か動揺してしまったがな」

「鷹塔さんは、表向きでは探偵という職業に就いているそうですが…… 本当は違うんですよね？」

葵は先ほどの魔術の話でそう確信づけた。ただの探偵ならば、事務所を見えないように隠したりできない。

早合点な気もするが、葵にはもう一つ、鷹塔を一般人ではないと確信付ける証拠を持っていた。

「こうして鷹塔さんを紹介してくれた仲介人 親父はこう言っていました。『非日常に関わる覚悟はあるか？』と」

もはや実の父親からそのような言葉を聞くことになるとは思ってもみなかった。

しかし、葵はそれを肯定した。

『彼女の真実』に近づけるのならば、どんな方法にでも手を伸ばしてみせる。一年前、葵はそう自身に誓ったのだから。

「それは、俺が魔術師という存在だと知って尚、か？」

鷹塔の問いに、葵は是として肯いた。

葵の覚悟に、鷹塔は一刻の間、無言で何かを思案し続け 唐突

にこのようなことを尋ねた。

「君をそこまで駆り立てる要因は何だ？」

「え？」

予想し得なかった質問に、葵はそんな言葉を漏らす。

鷹塔は続けた。

「今回の事件を解決したい理由。非日常に足を踏み入れる理由、といったところか。何が君をそこまで突き動かしている？ 何が君を

行動へと移行させているんだ?」

畳み掛けに問う鷹塔に葵は少し首を下ろし 思いつめた顔で、

「……非日常から守りたい女の子がいるんです」

そう、自分の気持ちをはっきりと述べた。



「守りたい女の子がいる？」

葵の吐露した言葉に、鷹塔は少し眉を顰めた。

鷹塔は当初、事件を解決したいと申し出たことをあの人の息子であるからだと思いついていたのだ。しかし、いざこうして聞いてみると全く想定していなかった言葉が出てきた。

故に、鷹塔は多少の困惑を隠せずにいた。人差し指でデスクをトントンと小突きながら、彼の放った言葉の意味を考える。

「その女の子とやらは、今回の事件に関係しているのか？」

しかし、結果的に一人思考を走らせても結論は見出せなかった。

鷹塔は端的にそう尋ねる。

葵は少々視線を落としながら、「確証はありません」と返答した。

「そんなことはないだろう。ほんの1%でもありえると思ったからこそ、君はここに来たんだろう？ 今の君の様子を窺えば、その女の子が少なからず事件との関連性を持っていると理解できるぞ。話してみてくれ」

鷹塔の問い詰めに、葵は数秒間沈思し、顔を上げた。

「あの、こんな話をしてもらえても信じてもらえるか分かりませんが、聞いてもらえますか？」

「それは話の内容によるな。まあ、できるだけ信じられるよう努めてみよう」

了承を得た葵は、それを話し始めた。

桐生穿理という少女が一年前に宿していた人格性と人間性。そして 高校卒業間際に起きていた連続殺人事件との関わりを。

桐生穿理は、普通の範疇に収まらない少女だった。

月宮葵が彼女と出会ったのは高校三年生に進級が決定し、同じクラスになってからである。それまでにも『桐生穿理』という少女の存在は学園内でも有名なものとなっていた。

葵もその噂を断片的に耳にしていたが、初めての会話となったのが三年生に昇級し、四日が経った頃だった。

葵はその人柄の良さ与人望の厚さで知れ渡った人物だった。絵に描いたお人好しとも呼ばれ、クラス内では学級委員長も務めていた。対照的に、桐生穿理はたったの四日でクラス内において浮いた存在となっていた。

なぜか。

彼女は、満足に会話ができなかったのだ。

三年生になり、新しい友人を作ろうと桐生穿理に話しかけた女子は、こう質問をしたそうだ。

「桐生さんって、凄く美人だし肌が綺麗だよね。お肌の手入れとかどうやってるの?」と。

同性の中での会話とすれば、それはごく普通の会話だった。おそらく、話しかけた女子もその問いに対する答えが返ってくると思っていたのだろう。

しかし、彼女は笑いながら、こう返答をしたのだ。

「私に肌のことを訊いて何を企んでるの? 殺すわよ」

それは、誰もが予想しなかった答えだった。

沈黙が訪れ、それほど心が強くなかったその女子は、その場で泣きそうになってしまった。

その様子を、葵はしかと見ていた。最初は桐生穿理が悪意を持って放った言葉だと思い、彼は注意を行うために駆け寄ろうとした。

しかし、それは違っていているようだった。

何とか泣き出しそうな衝動を抑え、その女子は愛想笑いを振りまいてその場から立ち去ったのだが、肝心の桐生穿理の様子がおかし

かったのだ。

その横顔だけで、葵は理解した。

本当に泣き出しそうだったのは、桐生穿理の方だったのだと。

顔は絶望に歪んでいた。目尻には大粒の涙が溜まっていた。唇は震え、とんでもない事を言ってしまったと後悔の感情を表していた。

そうして、彼女は消えそうな声でこう呟いた。

ごめんなさい、と。

その直後、月宮葵は桐生穿理に話しかけた。

桐生さん、泣きそうな顔になってるぞ、と。

その日から、葵は穿理に接し始めた。

夏になっても、桐生穿理のコミュニケーション能力に変化は生じなかった。

授業中、穿理に教科書の音読や回答を求める教師はいなくなり、彼女と接する生徒は学園でも少数の人間だけとなっていた。

葵と穿理の会話には、相変わらず齟齬が生じていた。

「この頃楽しいことはあったか？」と葵が尋ねると、

「その質問の裏では何を考えているの？ 刃物で体を切り刻まれないの？」などと穿理が物騒な言葉を放つ始末だった。

しかし夏の本番、七月の中旬に至るまでに、穿理の言葉遣いや会話の齟齬には慣れてしまっていた。耐性がついてしまったのだろう。

いや それ以上に、そんな成り立たない会話を自分達なりのコミュニケーションだと思いついていたのかもしれない。

葵が気楽に問いを投げると、

穿理が会話に沿っていない応じ方する。

しかし彼女自身、少なからず自分の対応に自己嫌悪している節があつたように葵は思えた。

彼女は葵との別れ際、いつもこう呟くのだ。

ごめんなさい、と。

そして、季節は冬に差し掛かり、その事件は勃発した。

連続猟奇事件。そのような装飾を施された事件の概要は、確かに事件性の理に適っているものだった。

被害者は全員、首から上を失くした状態で発見された。それは刃物による切断ではなく、まるで首根っこを掴まれて千切られたような犯行だった。

そして、その事件が起こり始め、変化が生じたのは街の様子だけではなかった。

桐生穿理が不登校になり始めたのだ。

彼女のことを気になった葵は、担任から住所を聞いて彼女の自宅に訪ねたのだが、穿理の父親は「五日前の夜から帰ってない」と事情を話した。

五日前。それは連続猟奇事件の最初の犠牲者が出た日である。

だからこそ、葵の焦心は本物だった。

そして、行方不明となっていた桐生穿理をようやく見つけたあの日。

葵はその出来事に巻き込まれ。

連続猟奇事件の犯人を知ってしまったのだ。

「その後、穿理は一週間眠ったままでした。去り際に残した犯人の言葉が本当なら、俺はその人のことを警察に通報するわけにはいかなかった」

一通り話し終わると、鷹塔は「……ふむ」と顎に手を添えて思索するように険しい顔になった。

「『桐生』という性にコミュニケーション能力の欠如……なるほど、【負極連動者】か。こいつは驚いたな」

「負極、連動者……？」

「葵くん。この話はまた後日にしよう。君の話を整合するのに少し

時間が掛かる。そうだな……二日後の午前十時は空いているか？」

「はい、その時間なら」

葵が首肯しながら答えると、「よし、なら今日は解散だ」と鷹塔はチエアから立ち上がった。

月宮葵を見送った後、鷹塔は事務所に戻り、窓際の位置に佇んで彼の去り姿を俯瞰する。

ゾクリ、と背筋に這い上がったのは悪寒か。それとも歓喜ゆえの快感か。

「さて、接触時間はいつにするか」

内ポケットから煙草を取り出し、口に咥えようとする。が、手が震えていたためか床に落としてしまう。

「」

鷹塔は煙草を拾おうとはせず、靴底でそれを踏み潰した。

「まさか、こんな近くに貴方達がいるとは思っていませんでしたよ」  
呟きは誰に聞こえるまでもなく、小さな余韻を残し消え去った。

その日の夜、住み始めたアパートを後にして夜の街へと繰り出した。

最近になつて実家を離れ一人暮らしを始めたのだが、一人の時間を作れるというのは本当に気分が高まるものだった。

実家に住んでいた頃は、多くのしきたりやら琴の稽古やら就寝時間まで決められていて、さらには家の中で出歩ける場所さえも限られていた。

自分の家を自由に闊歩できないのがあんなにも苛立つものなのかと実感を得たのは八畳のワンルームに引っ越してからの話である。

まあ、快適な一人暮らしを始めたのは良いのだが、邪魔な要素はある。葵のヤツが電話も無しに転がり込んでくるのだ。

それもその理由の殆どが両手に食料品を提げて「ちゃんと飯食べてないだろうからな」、という言葉で始まるものだから後頭部にハイキックをしたくなる衝動が治まらない。本当に馬鹿にしてる。

私は朝食、昼食、夕食全て、新鮮な米を洗って炊いた白米に梅、明太子、山葵の茶漬けという豊富なレパトリーで食しているのだ。ちゃんと栄養ドリンクもプラスしている。

だから、食生活に口を挟まれる理由などない。

……と思っていたのだが、先ほど妹の理夜りやが家に上がりこんできて「ちゃんとご飯食べてる？ 実家にいた頃みたいにお茶漬けばかり食べてない？」と詰め寄ってきたものだから、食生活に少し不安を持ったのも事実だった。

その後、理夜は「葵さんと上手くいつてる？」とか「葵さんどこまで進んだ？」やら笑顔で拷問じみた詰問を連発してきた。そのせいで一人の時間を堪能できやしなかった。

徐々に苛立ちを募らせていった私は、理夜の「処女は卒業した？」という言葉で遂にキレてしまい、後頭部にハイキックを食らわせて

気絶させ、わざわざ嫌悪している実家に電話をして使用人に連れて帰らせたのだった。

そうして、ようやく家で一人になることができた。

のだが……先ほどまでの理夜がいた騒がしい時間を思い出すと、なぜか寂しさのような感情が押し寄せてきた。

悶々とした気分は時間が経過しても治まらず、再び苛立ちを沸騰させた私は気分を落ち着かせる為、こうして夜の街を歩いていた。

時刻は直に深夜零時に差し掛かるうとしている。葵の言っていた殺人事件が街に浸透しているからか、道行く先に人影は少ない。

道中、誰かとすれ違っても誰もが足早に先を急いでいる。おそらく、殺人事件に遭遇しないよう帰路に着こうとしているのだろう。

そんな街中、中心街にまで歩を進めると人の数は増える。ざっと見渡して五十人は超えているだろう。

近くに誰かが居れば事件には遭わない、そんな一般人らしい考えが透けて見えるようだ。

そこまで思っ、私は自分の思考したことに疑問を持った。

……私は何を考えているのだろう。自分だつて一般人に変わりないじゃないか。

確かに一年前、私はあんなことを仕出かしてしまったけど、葵のヤツももう怒っていない。だからあんなことをした私が一般人ではないと思ひ込むのはおかしい話だ。

「苛立つ……」

声に出しているところ、自分の感情が昂ぶっているのは明瞭だった。

その呟きの声量が少しばかり大きかったのか、通行人から視線を浴びた。

私はその視線を無視して、ただ歩を進めた。

まだ、夜は始まったばかりだ。

その後、西区の住宅街に立ち寄った。

私が住んでいるのは東区の住宅街で、この西区は真ん中の地区つまり中心街を通らなければ行くことはできない。

西区に来るのは久方ぶりだった。というのも、一年前に卒業した高校が西区にある為である。

中心街でビルに設置されていた時計を見た感じ、時刻はそろそろ深夜一時といったところだろう。そんな時間帯にもなると人気がなくなるのも自然だった。

頼りになる明かりも等間隔に設置された街灯だけだが、どれも古びていて点滅状態だ。

そういえば、とこの辺り治安が悪くて有名な地区だったと今更ながらに想起した。

それ故か。 いや、それ故であってはならない。

「  
道を曲がった瞬間、男性が倒れているのを見つけた。

その男性は人としての死に方をしていなかった。

当然だ。腹部に大穴が空けられて絶命するなんて、断じて普通の人間の死に方ではない。

辺りに飛び散った血から散発する濃厚で鼻腔に絡みつくような臭いを、私はどこか匂いとして認識していた。

この瞬間。

私は、何か言い様のない感情に迫られた。

「あ  
」

一年前のあの出来事が脳裏に蘇る。

明確化された過去が、まるで映像ヒジメのように頭の中を駆け巡る。

私は、なぜかこの魂の不在した存在に触りたくなつた。



どこか私を吸引するような感覚が、  
どこか魅了するような死体の光景が、  
そして。

この死体には、自分と『同じモノ』が残留しているような気がして

「待て」

突然の声に、私は我を取り戻した。

声は男性のもの。声質からして若い……しかし、どこか威厳を含んだ声音だった。

「桐生穿理。その死体に触れるのは現時点においてまだ早い」

カツン、カツンと甲高い足音を響かせながら、その男性は暗闇の中から私の方へと歩み寄った。

「その死体からは残滓が虚空に浮流している。見た限り、『負極』の耐性は付いていないと窺えるな。いや、発現していないだけまだマシといえるか」

そして、立ち止まった時には、チカチカと青白く点滅している街灯が、その男性を照らしていた。

黒いスーツを身に纏ったその男性は、口元に薄い笑みを浮かべながら、

「初めましてだな。負極連動者」

そんな、訳の解らない挨拶をしてきた。

黒いスーツを身に纏ったその男を、私はなぜか普通の人間ではないと直感してしまった。

街灯の点滅する灯に照らされているその男は、どこか不遜な……  
それでいて不敵な笑みを浮かべながら再び歩を進めた。

男は私に歩み寄る。

正気を取り戻した私は、なぜかこの男に敵意を抱いていた。いつの間にかこの男を強く睨みつけてしまっている辺り、その敵意は本物と言えた。

「俺に敵意を定めるか。だが、その感情の方向性は誤りといえるぞ、桐生穿理」

「……なぜ、私の名前を知っているの？」

「ほう。会話に成功している辺り、存在としての支障は治療されたようだな。ますます興味が湧いてきた」

私の投げた問いに心じず、男は胸に風穴の空いた死体の前で足を止めた。

「この死体の負極侵蝕率は軽度なものだ。二〇%といったところか。しかし、ただそれだけの残滓でお前を魅了したということは……ふむ。第三者の治療も完全ではなかったということか」

横目で死体を見据えながら、平静とした顔で言う。

「……この男、何で人間の死体を目の前にして普通でいられるんだ。

「お前、何？」

気づけば、私はそう口にしていた。

この男は、あいつと同類な気がする。普通という類から外れ、常識という範疇すらも外れたあいつと。

男はくく、と愉快気に笑いを噛み殺す。

「誰ではなく何、ときたか。確かに、この状況での尋ね事としては実に適している」

何が面白いのか、男は口元に笑みを刻んだままだ。

「俺は鷹塔祭だ。お前の言う『何』という問いに応えるなら魔術師の類といったところだな」

「魔術、師……？」

問い返すように呟くと、男　鷹塔はああ、と首肯しながら内ポケットに手をつ込む。

「今回、お前との接触を図ったのは俺自身の目で確かめたかったからだ。日本の裏家系において第一位の座に君臨し続けていた【桐生家】。その若き姫君の現状をな」

シガーケースから煙草を取り出し、口に咥えながら鷹塔はそんな理解不能な事を言う。

事実、私は鷹塔の話の頭で理解できずにいた。

自分の家が裏家系と言われるのは初めての事だし、魔術師なんて名乗られてそれを信じるのは普通じゃない。

……いや、違う。

『桐生穿理は普通の人間だから、信じることなんてできない』。

その固定概念が今の私を象っているのだとしたら、私はなぜ、鷹塔を普通ではないと敵意を抱いたのだろうか？

「『普通』の人間は『普通』であるが故、『異常』という人種を見分けられない」

鷹塔はライターを取り出し、煙草に着火しながら静かな口調で言った。

「まあ、異常者にも二つの種類が在るんだがな。『自身から異常である』と外的に意識させる異常者』と、『異常である事を隠蔽し、外的意識を妨げることのできる異常者』だ。俺は後者に当て嵌まる」

「……何が言いたいのか？」

「簡単なことだ。お前が俺という存在を『何』という言葉で当て嵌めた。それは、俺が妨げていた『異常』という外的意識を感じ取った』ということだ。お前は自分を普通だと思っ込んでいるようだが、実際、普通に成りきれていない。逃げてないで自覚したらどうだ？

お前は俺と同じ、異常であることを隠蔽し続けている異常者だとい  
うことにな」

「……ッ！」

私は再びを鷹塔を睨みつけた。

なぜ、赤の他人にそんなことを言われなければならない。

私は異常なんかじゃない。

正常なんだ。

普通の人間なんだ。

こうして鷹塔と会話が成立している時点で、一年前の私とは違  
うと証明されているのだ。

呪縛も束縛も、私を縛り付けていた鎖はとうに外れている。

私は普通に成れたんだ。だから、こんなわけの分からない男に忠  
告なんてされる筋合いはない。

でも、それなら、何で憤慨する必要があるのだろうか？

自分が普通であると確固たる意思を持っているのなら、軽く聞き  
流す程度の素振りでは終始する。

でも、私は鷹塔が発する一言一言に苛立って仕方がない。鷹塔の  
言葉が私の脳髄を洗脳していくような、そんな感覚さえ覚えてしま  
う。

なら、私、は

「邂逅初日から長話になってしまったな」

黙りこむ私に、鷹塔はつまらなそうに煙草を落とし、靴底で踏ん  
で火を消した。

「人払いの結界を張り続けるのも面倒になってきた。今日はこの辺  
りで失礼する。桐生穿理、自分が普通に在り続けたいのなら、夜に  
街をうろつくのは控えておけ。今のお前では、敵うことすらできず  
に死ぬぞ」

「…… どういう意味よ」

尋ねると、鷹塔は踵を翻しながらこう答えた。

「今回の事件を起こしている犯人は、お前を狙っている可能性があ

るといふことだ」

そう言い残して、鷹塔はこの場から去って行った。

私は……その場に立ち尽くしたままだった。

ああ。きっと鷹塔の言う通りだ。私は自分を普通だと思い込んでいただけで、普通に成りきれていないのだろう。

鷹塔が異常者だと見抜けてしまったことで、それが証明された。

いや、それ以前に。

眼前に在る死体を直視して、悲鳴を上げなかった時点でそれに気づくべきだったのかもしれない。

鷹塔さんの事務所に初めて立ち入ったあの日から、二日はあつと  
いう間に過ぎていった。

その間、俺は地道に大学の出席日数を確保していたのだが、気にな  
る事が一つ増えていた。

今日の大学の授業の一眼目を終えた後の帰宅途中、ちゃんと飯を  
食ってるか確認しに穿理の住むアパートに立ち寄ったのだが、イン  
ターホンから聞こえてくる小さな否定によって家に入ることを拒否  
られた。理由を訊ねたところ、俺と会いたくない、顔も合わせたく  
ないとの言い分だった。

……何かしたっけな？ と考えた末、二日前に鷹塔さんの事務所  
に行くのを内緒にしたのがいけなかったのだらうと思いつた。し  
かし、穿理自身の事で相談をしに行ったと言うのもどこか恥ずかし  
かった。なので、彼女の機嫌が直るまでそっとしておこうと結論付  
けた。

穿理のアパートから郊外まではおよそ二キロといったところか。  
電車を利用した方が早いのが、約束の時間まで時間はそれなりに余っ  
ていたので徒歩で向かうことにした。

郊外地区に辿り着くと、二日前と同様に大きく息を吸って新鮮な  
空気で肺を満たした。ここ周辺は本当に良い空気をしていると思う。  
中心街の空気と比較できるほどに淀みの無い大気なのだ。

「そつえば、桐生の実家近辺もこんな景色なんだよ……」

過去を思い出しつつ、俺は二日前と同じ場所を目指して歩を進め  
た。すでに地図がなくても場所は把握できていたので、辺りを呆と  
見回しながら単調な足取りで歩き続けた。

そして なぜか高校三年の頃の思い出していた。

あの頃、俺と穿理を取り巻く環境は確かに正常で普通だった。会

話が成り立たないのもいつしか当たり前の日常と化していて、そんな日常を楽しんでいた自分も在った。

さらに想起すれば……一年前の十二月。クリスマスにシルバーアクセをプレゼントしたあの時だけ、穿理は「ありがとう」と言ってくれたんだよな。

あの時は、一瞬だけ会話の齟齬が生じなくて物凄く動揺したけど、穿理は気にしていない様子だった。いや、それ以上にどこか嬉々としていた。それからすぐに会話の齟齬は再開となったけど、なんであの時だけ会話が成立したのか未だに疑問と思っている。

……まあ、あの時の穿理の嬉しそうな笑顔を思い出すと、そんな事はどうでもいいって認識が変わっちゃうんだけどな。

と、そういう過去を思い返していると、視界に鷹塔さんの姿が映った。彼は片手を上げながら俺を待っている。

「すみません。わざわざ待っていてくれたんですか？」

「まあな。俺としても早く話を始めたいところだったし、焦っていた部分もある」

……焦る？ 俺との用の後に何か急用でもあるのだろうか。

「まあ、とりあえず中に入ろう」

気にかかりながらも、俺は鷹塔さんの促しに頷き後を追った。

昨日と同じく、俺はソファアに座った。鷹塔さんは「少し待っていてくれ。良い代物が手に入った」と笑いながら給湯室へと向かった。

それから約五分後。給湯室の扉を開けて現れた鷹塔さんの両手にはコーヒークップがあり、その一方をソファア前に設置されてある木製の机に置いた。

「良い代物って、このコーヒーですか？」

「ああ。イギリスにいた頃に初めて口にしたんだが、これがあまりにも美味くてな。昨日の朝に中心街まで赴いて購入してきた。まあ飲んでくれ」

嬉しそうな笑みを浮かべながらそう促すので、俺はコーヒーカップを手に取り、口元まで運んだ……。のだが、何か違和感に気づいた。試しに一口飲んでみた。……間違いない。これは

「あの、鷹塔さん……」

「ん？ どうだ、美味しいだろう？ いや、まさか粉に熱湯を注ぐだけで本場の美味しいコーヒーが飲めるとはな。わざわざロンドンにいる同僚に尋ねた甲斐があった。コンビニエンスストアで三百円足らずで買えるなんて良い時代になったもんだ」

やっぱり。これ、インスタントコーヒーだ……。

「あの、鷹塔さん。凄く言い難いんですけど……」

「なんだ？」

「……これ、インスタントコーヒーですよ？」

「……コーヒーじゃないのか、これは？」

「いや、コーヒーであることに変わりはないんですけど、粉末にお湯を注ぐだけで作るのは本場とは言わないと思います」

それから、俺は勘違いをしている鷹塔さんに説明を始めた。

まず、インスタントコーヒーは香りやコクが豆から挽いて淹れたモノとは段違いに不味いということ。コーヒー豆にも膨大な種類があり、本当に好きな人は自分好みの豆を選別して購入すること。さらにいえば豆をから挽いて淹れる用の器具が存在すること。

結論。俺は十四歳から親父の影響で豆から挽いたコーヒーを飲んでいたので、これは断じて本場のコーヒーではないと断じた。

で。説明を終えた後、鷹塔さんはデスク上に置いてある古びた電話機に手をかけ、キーボードをタイピングするように物凄い速さで番号を押していった。

そして、受話器を耳に当てて相手が出た瞬間、

「ハメたな？ お前、ハメたな？ 聞いたぞ、コーヒー好きは豆から挽いたモノを飲むらしいじゃないか。……おい、聞いてんのかコラ。なに笑い堪えてやがる。もしやお前、ロンドンで俺に出したコーヒーも粉末だったとか抜かさないよな？ おい聞いてんのか



！ 爆笑すんじゃないやねえ！ 次にハメたら殺すぞ！ 覚えておきやがれッ！」

ガチャンツ！ と乱暴に受話器を戻し、なぜか片手の掌で顔面を覆う鷹塔さん。

嫌な沈黙が続き、二分ほど経ってから鷹塔さんは大きいため息を吐いて、

「さて、では二日前の話を再開するか」

と、チェアに座って足を組み、背もたれに寄りかかる鷹塔さん。

……なんか仕切りなおしてみたいな雰囲気になっていた。

とはいえ、先程の事を追求すると嫌な目に遭いそうな気がしたので、俺は鷹塔さんに話の先を促した。

「最初に一つ尋ねたいんだが、葵くんはなぜ自分が生まれてきたと思う？」

「……はい？」

話が突飛すぎて、思わず首を傾けてしまった。しかし、鷹塔さんは至って真剣な面立ちをしていた。

「深く考えこまなくていいぞ。君が考える、君がなぜ生まれてきたのかを思考すれば良い」

「えっと、そりゃあ親が産んでくれたからじゃないですか？ 人間は誰でもそうやって生まれてくるものでしょう」

一番簡単に思いついた回答を述べたのだが、鷹塔さんは「二十点といったところか」と返答した。

「まあ、君のような普通の人間の見解ではそうなるだろうな。だが、君の回答はあくまで世間一般論であり、『「普通」の回答』に過ぎない。当然と言えば当然だな。君は普通の世界（じょうぶな）で生き、普通の人生を送ってきたからだ。だが、非日常に踏み込むとそうはいかない。『

「普通」の人間』が非日常の事柄を認識するというのは、同時にその人間が非日常側に立ち位置を変えらるということだ」

「つまり……鷹塔さんが言いたいのは、非日常の事柄を知りたいのなら、非日常側に立ち位置を変えらるってことですね？」

「ああ。これまで君が培ってきた普通の人生を、非日常の人生に変えてもらう。それを誓うなら、今回この町で起こっている事件の本質を教えよう」

どうする？ と鷹塔さんの真剣な眼光が尋ねていた。

……普通の人生を非日常の人生に変える。

迷いはあった。逡巡は当たり前だった。決断が怖いのも当然だった。

でも、俺は

「穿理を守れるのなら、答えは決まっています。俺は非日常側の人間になります」

そう、はつきりと言えた。

「ちゃんと考えたのか？ 随分と早い決断のようだが。死ぬかもしれない運命に足を踏み入れるのは馬鹿のすることだぞ」

「死にかけるのは慣れていきますので。生憎、俺は一年前に誓ったんですよ」

そう。もう二度と、穿理を悲しい目に遭わせないと。

その為なら何でもやる。非日常でも何でも、足を踏み入れてやる。

「なるほど。君は馬鹿だな」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「よし、なら話の本題に入るか」

どこか楽しげな笑みを浮かべながら、鷹塔さんはデスクの上に置いてあった一枚の用紙を俺に投げ渡した。

中空でそれをキャッチして、その用紙を見やる。

「なんですか、これ？」

「今回、西区の住宅街で犠牲者となった人間の裏情報だ。この二日間で俺が直々に現場を回って調査した」

「調査つて、それは警察がもう」

と、そこまで口にして俺は気づいた。

鷹塔さんは、俺が非日常の人間になったからこそこの用紙の拝見を許可した。

警察は非日常側の人間じゃない。彼らに行える調査はあくまで『普通』の調査』だ。

普通の人間には普通の調査しか行えない。つまり、ここに記されている概要は

「読んでみる。未知を知る第一歩だ」

いつの間にか煙草を啜っていた鷹塔さんに向かって一つ頷き、俺は用紙に記入されてある文章を読み始めた。

「第一の犠牲者。負極侵蝕率一五％……。殺害前の存在衰弱、レッドライン。第二の犠牲者。負極侵蝕率二三％……。殺害前の存在衰弱、イエローライン。追加、死体から半径五メートル範囲に負極の残滓」

「これが非日常の人間が行った際の一般的な調査だ。何の事だか全く理解出来ないだろう？」

「ええ、さっぱり解りません」

素直に首肯する俺だが、一つ引っかかることもあった。

「鷹塔さん。この負極って……」

「ああ。君の推測通り、この事件は桐生穿理と関連性があったぞ。そう。二日前、鷹塔さんは穿理のことを【負極連動者】と言ったのだ。

「今日は長話になりそうだな。葵くん、コーヒー淹れてきてくれ。君の方が淹れるのは上手だろう」

空になったカップを投げ渡しながら、鷹塔さんは話を紡ぐ。

「今日は俺の外出時間まで話せるだけ話そう。まあ、ゆっくりとしていけ」

俺は大きく頷き、これからどんな話が聞かされるのか緊張を抑えながら給湯室に向かった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9843x/>

---

赤眼の断罪者

2011年11月25日00時12分発行